

ずいそう

## ゴジラ襲来

田中康正



1958年生まれの私、物心がついて最初に見た映画は1962年公開の「キングコング対ゴジラ」でした。当時4歳の子供にとっては細かいストーリーなどわかるはずもなく、只々でっかいスクリーンの中で暴れ回る巨大な2匹の怪獣の迫力に圧倒され恐怖におののいておりました。なかでもいまだに古いマニアの間では哺乳類顔の通称モスゴジ（「モスラ対ゴジラ」で使用されたスーツ）と人気を2分する通称キングゴジの不気味な爬虫類顔は秀逸で、夜な夜な夢に見てはおねしょをしたものです。

家に帰るとさっそく3歳上の兄と怪獣ごっこが始まります。何度もキングコング対ゴジラごっこを繰り返しますが、理不尽にも兄は必ず正義の味方のキングコング役で私は悪役のゴジラ役。最後には決まって取っ組み合いのケンカになりますが、幼い頃の3歳差はいかんともしがたく必ず私が泣かされて終わりとなりました。そのトラウマのせいか五十路を越えた今でも隠れゴジラマニアが続いております。

ゴジラとは数ある解説書でも言い尽くされている通り、ビキニ環礁近くでの水爆実験で目覚め凶暴化した古代生物の生き残りで、核兵器や核物質の権化として人類を恐怖のどん底に突き落とす存在です。ビデオやDVDのない時代、生まれる前の作品である1954年公開の「ゴジラ」を初めて見たのはテレビ放送でした。当時の角の丸い白黒テレビの中で暴れまわるゴジラでも充分怖さが伝わって来ましたし、ゴジラが通り過ぎた後の仮設病院の悲惨なシーンでは子供心にもやるせない気持ちになったものです。

そんな悪の権化であったはずのゴジラがいつの頃から正義の味方になって行くのでしょうか？

「キングコング対ゴジラ」公開から2年後の1964年に前出の「モスラ対ゴジラ」が公開されます。ここでもゴジラの悪役ぶりはいかに発揮され、スクリーンの中の人々は八八車に家財道具を積んで逃げ惑い、残留放射能に苦慮しています。

その後の2作品はゴジラを上回る悪役キャラの宇宙怪獣が登場してやや微妙な立場となりますがそれでも恐怖の対象である事には変わりありません。

しかし1966年に公開された「南海の大決闘」で一大転機を迎えます。そもそもこの物語は南海の孤島で密かに核兵器を作る秘密結社と遭遇した主人公たちがその島で眠っていたゴジラを目覚めさせ核兵器工場を

破壊させる物語です。劇中、宝田明氏（ご存知の通り第一作目の「ゴジラ」の主人公です）扮する大人の金庫破りが「核兵器を作る秘密結社もゴジラも人類の敵だ」と言うのに対し若者たちは「少なくともゴジラは中立だ!」と言うゴジラシリーズのターニングポイントとなるセリフが飛び出します。この瞬間からゴジラは恐怖の対象から正義の味方化していく事になります。

この「南海の大決闘」が公開された1966年とは世はまさにいざなぎ景氣の真只中。日本の経済は大きく拡大を続け、ついには世界第2位の経済大国になっていきます。そして忘れてならないのがこの年の7月に茨城県の東海村で日本初の商用原子力発電所である東海発電所が営業運転を開始した事です。つまり1945年の被爆からずっと恐怖の対象であった原子力が一般家庭に明かりを灯した年に、偶然なのか意図的なのかゴジラが正義の味方への道を歩み出すのです。

調べていくとゴジラと原子力発電所には密接な関係があることに気がつきます。日本における原子力発電所計画は1954年3月に国会に提出された原子力開発予算から始まったとか。くしくもこの年の11月に第1作目の「ゴジラ」が封切られます。そして東海発電所で天然ウランが初臨界に達した1965年の5月頃と前後して2度宇宙怪獣を撃破したゴジラは前記の通り原子力発電所が営業運転を開始した1966年に恐怖の対象ではなくなるのです。

第一期原発製造ラッシュを迎える1970年代には、ゴジラは怪獣ランドでのんびり暮らしたり、当時大きな社会問題となっていた公害を具現化した公害怪獣を放射能光線で焼き払ったり、挙句の果てには度重なる核実験で暮らしを脅かされ地上を攻撃してきた海底王国をたたきのめしたり（本当にそれでいいのかゴジラ!）とどんどん人類の味方になりヒーロー化されていきます。

その後も原点復帰をしながらゴジラ映画は量産されていきますが、私は本来の放射能の権化であるはずのゴジラの恐怖を忘れておりました。今年の3月11日までは。平成23年3月11日、現実世界でゴジラ襲来が起こったのです。そして今でも放射能と言う目に見えぬ恐怖が続いています。

今日現在、日本には完全に飼いならしたはずのゴジラがまだ50頭以上眠っています。